

J. セルウォール—政治, 旅行, 農業

吉 田 泰 彦

要旨*

本論考では E. P. Thompson の雑誌論文 “Hunting the Jacobin Fox” (「ジャコバン狐を狩り出す」1994) を軸に、『月刊誌』(*The Monthly Magazine*—以降 “MM” と略記) に寄稿された John Thelwall によると推定される 4 つのエッセイ作品—「大規模農場について」(“On large Farms”, 1796), 「ウェールズの一小農家」(“A Little Welch Farmer”, 1798; 1800), 「ワイ河種々相記」(“The Phenomena of the Wye”, 1798), 「徒歩旅行記」(“A Pedestrian Excursion”, 1799-1801)—を中心として, 彼がロンドンを去りウェールズにおいて農業を営む時期, および, これに至る経過を検討して, セルウォールの風景や農業に対する態度が彼の政治的姿勢と分かち難く絡み合っていることを主張した. 最初に, Judith Thompson 制作によるセルウォール年表に基づき, 誕生から始まり成長期, 政治活動期, 南ウェールズへの移住までを概観して本論の背景を紹介した. 続いて, 大規模農家に関するエッセイから, セルウォールが政治活動家として活躍していた時期に早くも農業に社会・経済的な視点から深い関心を持っていたことを論じた. 次に, ウェールズのリスウェンに移った直後 (1797 年) と約 2 年後に発表されたエッセイ「ウェールズの一小農家」からは, 政治改良家としての道を塞がれたセルウォールが農業を通じて社会改良家としての方向を真剣に探る様子を辿ることができること, と同時に, 実経験に基づいて, リアリティを重んじつつも地元人のコミカルな描出にも力を発揮する, 文筆家としての彼の幅広い文学的資質が見て取れることを論じた. また, 当時の社会現象とも評すべきギルピンの『ワイ河紀行』にあからさまに向こうを張った「ワイ河種々相記」に関しては, かつて画家を目指した経歴を持つセルウォールがギルピンを凌駕すべく独自のピクチャレスク観を展開していることを述べた. そして, またこのエッ

セイにおいても最後には美観の枠組みを離れ、当地の自然災害の話題から発して政治的視点を持ち込こんでいることに着目した。最後に、「徒歩旅行記」は E. P. トンプソンの主張する「大部分がくロマンティックでピクチャレスクな物語」の変哲もない繰り返し」というよりはむしろ、作者自身の記す「労働者階級の人々の歴史と実情に関連したあらゆる事実」の描出に傾いた作品と見るべきであることを論述した。このようにして、ロンドンにおける政治のアクティブな場から退いたセルウォールが、ウェールズの片田舎から農業という社会の根幹を支える営みに対する関与を通じて、政治的コミットメントの再構築を試みたことを主張した。

はじめに

セルウォールは現状ではそれほど世に知られているとは言い難い人物であるから、最初に、今回の論考に関係する時期である 1798-1800 年に至るまでの年代記的な動きをジュディス・トンプソンが作成したインターネット掲載記事“Chronology of the Life of John Thelwall” [Romantic Circles: “John Thelwall in Time and Text”] を使用して重要な点を確認したい。セルウォールは 1764 年に Covent Garden の Chandos ストリートで生まれ、(ちなみに、ワーズワスは 1770 年、コールリッジは 1772 年の生まれである) 父親はそれなりに成功した絹織物商人であったが、72 年に亡くなっている。77 年には学校をやめて家業の手伝い、80 年には仕立て屋の見習いに入るが、長続きはせず、82 年からしばらくは義理の兄の下で法律家の勉強をしてのち弁護士のところまで年季奉公をする。セルウォール自身は画家への強い希望をもっていたが、経済的な理由から断念している。1780 年代中期、すなわち、21-2 歳頃には広義の職人修行から方向を変えて作家、いわゆる物書きを目指すと同時に、当時多数発生しつつあった社会改革を目標とするいろいろな団体に次々と関わり始め、同時に複数の団体で活動している。1793 年 10 月には、セルウォールの生涯にとっておそらく最も重要な意味をもつことになる団体 London Corresponding Society (ロンドン通信協会) に加入し、類稀な弁舌と文筆の才能を発揮して瞬く間に最

高幹部にまで上り詰める。94年3月に大逆罪（“High Treason”）容疑で逮捕、ロンドン塔に収監、Newgate に移送—遙かに悪環境であるといわれている—12月に裁判があり、その結果無罪放免となる。大逆罪が認められれば死刑となるところであるから、社会的にも個人的にも極めて重大な出来事であり、同じく裁判から生還した John Horne Tooke からセルウォールはその後の身の振り方について、運動から足を洗うようにアドバイスされている。ただ、翌95年2月にはコヴェントガーデン近くの Beaufort Buildings で講演を開始するが、同年夏には上記協会を退会して家族と共に Wight 島に引っ込む。同年冬には会合の広告を出して、翌96年初めにはロンドンで講演を開始し、4月には止めさせられている。そして、ちょうどこのタイミングでコールリッジとの文通が始まる。96年5月から1年余りはほぼロンドンを離れて地方講演を続けるが、95年12月には、セルウォールを狙い撃ちしたともいわれる “Two Acts” あるいは “Gagging Acts” と呼ばれる過激政治運動禁止法が可決されている。だが、この頃出版されたセルウォールの著書『バークの書簡に関する穏健な所見』（*Sober Reflections on Burke's Letter*, 1796年刊）からは僅かでも活動に対する意欲が薄れたという印象は受けず、政治思想家、活動家としての姿勢がそっくりそのまま立ち現れる好著である。とはいえ、各地での講演は暴漢による妨害にあい、時に生命の危険にさらされるほどであった。97年6-7月には英国西部地方の旅行に出かけ—この経験が元となって99年のエッセイ「徒歩旅行」が書かれることになる—そして、Nether Stowey にコールリッジ、ワーズワスを訪ねて行く。また、このような行動の背後にはロンドンにおける政治活動引退がセルウォールの視野の中に入ってきたようであり、97年10月に南ウェールズのリスウェンに農地を借りて家族連れで移住して行く。この後、リスウェンでの農業従事が2年余り続き、借地トラブルがベースにあったようであるが、99年12月の娘 Maria の病死（5歳）を契機として農業から手を引いて—1800年に短期間 Merthyl Tydfil の製鉄工場労働者の政治運動に関わったともいわれるが、この件については、E. P. トンプソンは関与を完全否定、Corfield と Evans は程度は不明としながらも関与を疑っている—翌1801年には雄弁術の講師を

生業として始める。

上述のように私の出発点は E. P. トンプソンの「ジャコバン狐を狩り出す」であるが、彼の趣旨はセルウォールはリスウェンへ移住した段階で社会・政治改革活動から足を洗ったということであった（ただし同氏は、また、早くも 1963 年刊『英国労働者階級の形成』（176 頁脚注）において、リスウェン時代に「セルウォールは急進的政治 [の世界] にとどまった」とも記している）。結論を荒っぽく言うと、大筋では政治引退説は当を得ているように思われるが、リスウェン移住即ち政治活動廃業といった急峻な動きではなかったらしいというのが、現在の私の見方である。

「大規模農場について」

最初に扱うのは『月刊誌』1796 年 4 月号に寄稿された、大規模農場に関する 1 ページ弱の単発的な記事である。署名は“A. Q. Q. L.”となされていて、厳密に言えば筆者不明とせざるを得ないものである。セルウォールの作と推測するに足る多数の内的な証拠については後に述べるとして、『月刊誌』とその編集者に関する事柄を先に検討したい。1796 年 2 月号創刊の『月刊誌』の発行者は Richard Philips, 編集者は Dr John Aikin (Barbauld 夫人の弟) で、発刊を広告するために『趣意書』(*Prospectus, etc.*) が同年 1 月 12 日と同月 18 日に一両者は実質的に同じ内容のもの一発表されている。『趣意書』の要点を拾っていくと、「総目標は、もっともリベラルでヒモ付きではない計画に基づいて、精神の改良を促進すること」(The GENERAL purpose is to forward the mental improvement upon the most liberal and unshackled plan) であり、「有用な知識において人類の進歩を図り、そして、理性と自由の真正な原理に一心を捧げる一団の人々がこの世に存在するならば、経営者たちはその人々の仲間であることを公言するものである」(If there be any party peculiarly devoted to the advancement of mankind in useful knowledge and the genuine principles of reason and liberty, to that party they profess to belong) と記し、その立場がセルウォールのこれまでの政治活動の原理にかなり近いことが感じられる。取り扱

う内容についてはお決まりの死亡・誕生記事に加えて、新規事業・改良案、商業・製造業の景気報告、農業等々、そして第2版では劇、音楽、芸術に関する評論が追加される。直接的に政治に関連していないことはもちろんのことであるが、「進歩」、「改良」の語彙に表れているように啓蒙・改革主義的な態度を鮮明にしているところが最も目立つ。また、農業を含めて、経済的関心が強いことも特徴といえる。セルウォールと『月刊誌』の濃い付き合いはこの論考で取り扱う「ウェールズの一小農家」他数編の連載記事の寄稿はいうまでもないが、農業に行き詰まった99年には小説 *The Daughter of Adoption* の第1章を携え買い手を求めてロンドンへ出た時、リチャード・フィリップスが購入を申し出たのみならず前金まで支払ってくれたことが、1801年に公刊された『主として引退時に書かれた詩集』(*Poems, Chiefly Written in Retirement*)の「前書き」(xliv)に記されていることから相当な結びつきを見て取ることができる。

さて、肝心の掲載記事についてであるが、大規模農場の不都合な理由を挙げて反対することが主要な内容となっている。まずは実際の、経済的な理由である。例えば1,000エーカーの土地を一人で所有した場合と50, 100, 150に分割して10人ほどが所有した場合とでは、後者は最大の収穫を上げるために最大限の努力を惜しまないのに対して、前者は十分な努力の必要を感じないし、また感じたところで、手が回らないであろうから、比較すると前者の収穫高は6分の1程度少なくなるという見積もりで、要するに、国家的規模で見た場合の損失を問題にしているといえる。次に、前年度の小麦の不作に続く高騰の問題を取り上げて、小農家は地代、その他の必要経費を支払うために通常の時期に作物を売らなければならない、買い上げた大農家は数ヶ月後に高い値で販売した。すなわち、独占(monopoly)の悪弊である。三つ目は大農家はより少数の労働者を雇用するから貧困者の増加を招くという主張である。最後は、かつては貧困者が4-50ポンド節約して老年に小農場を借りて老後の生活を支えることも可能であったのに、独占の時流によってありえなくなったことを取り上げる。あるいはまた、大農家が自分の手を使って労働に精を出さなくなった等々、農業に関する現状システムにまつわる欠陥を次々と批判する。さらに追い討ち

をかけるように、貧困者が牛乳を手に入れられなくなったこと、鶏肉の高騰もあげつらって、大規模農場システムが「大いに有害」(highly injurious)であると結論づける。ちなみに、牛乳については『逍遙者』(*Peripatetic* 1. 29, 1793年刊)において、搾乳所を「健康増進飲料の製造所」(a place of salubrious refreshment)と呼び、あるいは、「徒歩旅行記」では「牛乳に関して、都会の住人は田舎の村人であれば誰でも好きなだけ口にできる贅沢品と考えがちだが、英国の最も豊かな地方であっても大抵の場合、実情は正反対である (milk: a luxury which the inhabitant of great towns is apt to suppose every cottager in the country can enjoy at pleasure. But in many of the most fertile counties in England the very reverse is the case)」と記している。また、独占の問題については「徒歩旅行記」において重要な話題のひとつになっているから、後ほど見ることにする。この記事がセルウォールの作であると仮定すると、創刊号に近い時期から彼が『月刊誌』に関係していたこと、また、古代の歴史についてポーフォートビルで講演をしていた頃すでに政治的観点から農業についてかなりの関心を抱いていたことが明らかになる(ただ、同じ1796年刊単行本 *Rights of Nature, part the second* (Letter III) でセルウォールは、農業を私有財産制度の発生という観点から歴史的に記述している)。さらに重要なことは、このエッセイに現れている農業に対する強い関心が、1年後の「徒歩旅行記」の執筆、最終的にはリスウェンにおける農業開始に結びついていった、とみることができるといえることであろう。

「ウェールズの一小農家」

セルウォールは『月刊誌』に“A Little Welch Farmer”という署名でエッセイを1798年11月号と1800年7月号に各1本投稿している。98年エッセイはリスウェンで農業を始めてまだ1年程度の時期に書かれたものであり、2つ目のエッセイと比べるとそれほど地方的詳細に立ち入っている訳ではないが、農業というセルウォールにとっての新規事業に対する新鮮な意気込みを強く感じさせるものとなっている。そして彼の農業にかける情熱は、後でみるように、

ある意味で政治改革から方向転換されたといつてよいほどの社会的関心と結びついている。また、論理的説得を旨とするこのエッセイの調子もその内容にふさわしく、比較的リラックスした文体とはいえ、かつての政治パンフレットの調子と共通点があるように感じられる。

このエッセイに含まれる話題は大別すると、ウェールズの急峻な山腹にある畑の畝の作り方、引き馬の頭数、給水装置の導入の3つとなり、「本物の科学と発見」(real science and discovery)に基づいた「農業改良」(agricultural improvements)についての提案と要約することができる。農業に関する著述家として知られた Arthur Young の『6週間旅行』(*A Six Weeks Tour, Through the Southern Counties of England and Wales*, 1768年刊)に記された見解を引き合いに出して始まる書き方に現れているように、論文の体裁を採っていることが特徴となっている。そしてセルウォールの強みは、近隣の山岳農地の観察に加えて、現地での農業に携わる経験と言つていいであろう。彼は40エーカー足らずの借地を少数の人を雇用して経営するに止まらず、雇い人とほぼ同じ程度に労働にも従事していたのである。この点では、職人たちに混じって専従活動家として政治運動に参加していたロンドン時代よりも深入りしていると見ることもできるだろう。ヤングが実際に訪れた Monmouthshire と Glamorganshire の農業法について提示した種々の改善案がかの地の農家にほとんど活用されていないことをセルウォールは難じた後、今度は、ヤングの批判する垂直の畝作りが当地の畑には必須の方式であることを詳説する。二つの意味でセルウォールの真骨頂がここに現れていると思われる、ひとつは実地の経験に基づいた見解であること、もうひとつは、これに関連した文章の魅力である。ヤングがウェールズ山間部を冬あるいは秋に訪れていれば強烈な降水に気づいたであろうとし、「ウェールズの農家が備えなければならないのはわか雨ではなく、奔流と洪水」であり、1年の内8ヶ月は雨季であるこの地方では山水が四方から吹き出して、垂直の畝方式を取らなければ山腹や堤防に位置する畑は冠水状態となることを指摘する。この指摘に続くビジュアルな描写は注目に値する—

筆者は、一昨年(1797年)の夏の後半に Glamorganshire と Brecknock のいくつかの山々を踏破して、これから記す状況を見る機会を得たのである。すなわち、せせらぎ以上の小川には出会うことはあるまいと思っていた高所で、川幅広く流れも急な場所を腰までつかって渡る羽目に何度も陥ったのである。しかも時には、そのためにかなりの道のりを流れに沿って移動しなければならなかった。また、私が現在住居を構えている小村でも、乾季には私の子どもたちでさえごく簡単に跨いで通れる小さな溝が冬場には増水して奔流となり、道路や野原に溢れかえり、家屋まで水浸しにしたのである。

(During the latter part of the summer before last (1797), I walked across several of the Glamorganshire and Brecknock mountains: and had occasion to remark the circumstance of which I am speaking: being frequently obliged, upon eminences where one would have thought it improbable that any thing more than a scanty rill should be met with, to wade up to my middle, through wide and formidable torrents, and sometimes to trace their course a considerable way before even this could be effected; and in the little village where I now reside, I have seen a little gutter, across which, in the dry season, my very children stride with the utmost ease, swoln [*sic*] in the winter to a headlong torrent, deluging the roads and fields, and inundating the houses.) [MM, 1798, vol. VI, 323.]

ここには、例えば『パークの書簡に関する穏健な所見』にみられる類の論理的説得に傾いた記述とは打って変わった、個人的な経験が具象的で鮮明な文体で語られていることが明らかに見てとれるであろう。そして、この論文調とエッセイ調の混合具合を自在に調整する文体はセルウォールの持ち味を発揮するのに適した文体とみることができよう。

次の話題は近隣の農家が耕作に使用する引き馬の頭数が必要以上に多いという意見である。いうまでもなく、余分な馬を飼うことは余分な飼料、世話を要することになるので、その分他に、例えばセルウォールであれば乳牛を所有する方が望ましい経営法であると主張して、地元農家が多くの馬を飼っている理由を馬自慢、見栄と断じて、合理性を欠いた経営を批判する。

最後の揚水機については、もし導入することになれば、重要かつ大規模な影響が見込まれる話、すなわち、この地方の気象条件を緩和する方策を述べる。前述のように多量の激しい降雨に悩まされる一方で、乾季には水不足が発生するワイ河沿いの畑地に、Mathew Boulton の発明した蒸気揚水機を応

用して「人工の雨」を降らすことをセルウォールは提案する。セルウォール自身の言葉を引用すると、「農作の過程を気候の偶然に左右されないようにすることは国家的重要性をもつ事柄」([to] place processes of agriculture in a state of independence of the casualties of seasons, is a matter of such national importance)であり、彼の姿勢には国家的規模の農業向上を目標とするヤングの態度と共通するところが認められる。(ちなみに、1797年から98年にかけては『月刊誌』に蒸気機関を使用する機械の発明に関する大小の記事が4本掲載され、用途も醸造、製塩、干拓、船の排水、用水路への給水等多種提案されているが、ボルトンの機械についてはよほど注目されていたとみえて、98年4月号294頁でほぼ全頁を費やして詳細な仕組みが紹介されている。)

1800年エッセイにおいては、当地の生活に慣れたセルウォールはアウトサイダーらしい、国家的視点からの中立的、科学的な提案を越えて、インサイダーの打明け話的な側面を含む姿勢を見せる。彼は全国的な情報ではなく、特定地域の農業のあり方を語ることにためらいを見せつつも、「観察眼をもち知性的な農家によって伝えられる詳細な事実」は「耕作状況に関するより完璧な、より満足すべき知識、そして、将来の不作・豊作の予測」を導き出すと述べて、南ウェールズ山岳地方の多雨気候および日照時間の農作への悪影響に始まり、リスウェン近辺の農家の対策の不味さ等、さらには、これらの農家のいかにも田舎根性丸出しの人間きの悪い慣行にも深く立ち入る。「観察眼をもち知性的な他所者の農家にしか暴露されない類の記述をたっぷりと含んでいるので、果たして2ヶ月後の同誌9月号(131-4頁)には長大な反論記事が登場する。冬季に食べ物不足してくると、動物の飼料となる野菜の栽培を惜しむ近隣農家の家畜が遠慮会釈なく他人の畑に侵入してくるといった話に加えて、浮浪者ならいざしらず、家族も養い、年2-300ポンドの利益を上げる農地も購入しているれっきとした土地所有者紳士が菜園、果樹園、鶏小屋からチビチビとした盗みを働くことを記す。どちらも話に聞くだけなら笑って済まされるが、セルウォールのような外来者の農家にとっては、筋の通らない深刻な被害をもたらす状況といえる。これらの記述から容易に推察できることであるが、この時期

のセルウォールは近所の人々とは相当に折り合いが悪く（ネザー・ストーウィに隠棲したコールリッジのスパイ事件に似て、政府の回し者による土地の無学な人々に対する唆しも功を奏したらしい）、一度はツルハシで頭を殴られて裁判沙汰にまで発展している。読み物の面白さとは裏腹に、セルウォールのリスウェンにおける農業生活は経営面での不調も含めて、種々立ちいかない時期を迎えることになる。

「ワイ河種々相記」

「ワイ河種々相記」とこの後取り扱う「徒歩旅行記」はどちらも著者自身の経験に基づいたエッセイになっている。後者はそのタイトルにあるように1797年の夏に敢行した長距離旅行に基づき、『月刊誌』99年8月号に連載を開始して1801年11月号で終了している。他方「ワイ河種々相記」は、やはりタイトルからわかることだが、97－8年にかけての冬に―すなわち、「徒歩旅行」の数ヶ月後に―行った小旅行の成果が同誌98年5月号と7月号に掲載されている。「ワイ河種々相記」はその冒頭に「ワイ河の魅力的な美は今時・・・ピクチャレスクの愛好者にあまねく知られており、ギルピンの記述によってふさわしい名声を獲得した」(The enchanting beauties of the River Wye...are by this time pretty generally known among the lovers of the picturesque. They have acquired a due celebrity from the descriptions of Gilpin) [MM, vol. 5, 343] と記していることから推測されるように、ギルピンの『ワイ河紀行』を念頭に置いて書かれた、一種流行に乗じた作品とみることも可能であろう。セルウォールが南ウェールズに移住した時、農業と文筆で暮らしを立てることが目論見であった。そして、それなりに詩人、作家としてのデビューは果たしていたが、世に知られた政治活動家としてロンドンを追われて隠遁先にリスウェンの地を選び、未だスパイに付きまといられる身としては、政治活動から距離を置く方針を取ることは理解できる選択肢である。しかも、＜ギルピン＞、＜ピクチャレスク＞を題材にするということは基本的に政治的世界から遠ざかることを意味し、少年時に画家を本業とすることを目指した経歴のあるセルウォールにとっ

て二重の意味で都合な分野であったにちがいない。もちろん、この当時、旅行見聞記という文学的ジャンルがすでに定着していたことが選択の背景となっていることはいうまでもない。

充実した記述内容、引き締まった文体からして、セルウォールが本家本元ギルピンを凌駕しようと意気込んでいたことは確かと思われる。そしてまた、政治活動から距離を置くといっても、社会批評を避けるというような意図は全くなかったことは、ワイ河旅行が「優雅と趣味と流行の評判を望む全ての人々」にとって「必須の教養」であると揶揄した上で、美観を求める風景画家を貶す以下の一節から明らかであろう。

大抵の画家は蝶々族といっていい—彼らはバラが花開き、そよ風が森の木の葉と戯れるような、太陽の穏やかな光の中でのみ羽を広げる連中である。

(artists in general are a sort of butterfly race—they expand their wings only in the genial rays of the sun, when the rose is in bloom, and zephyrs play with the foliage of the grove.)

[*Ibid.*]

そしてセルウォールの根本的な戦略が、いつ時の表層にしか目を向けることのない訪問者あるいは旅行者の視点とは異なり、土地に住む者の深い眼差しであることが、この後徐々に明らかになっていく。そして彼が、自然を見る目に要求されるのは「解剖」であると表現する時、批評家というより科学研究者あるいは美術職人的な響きさえ感じられる。

自然を観察するのは種々の相においてでなければならないと理解すべきである。どのような服を着せたら最もよく見えるかを知るためには、彼女を裸にしなければならない。解剖という表現が許されるのであれば、森や山の解剖は風景画家には必須である・・・木の葉を失った森、樹木が丸裸になった山、いや、周囲の山々の輪郭のみしか見分けることのできない夜の薄暗がりそのものが、ブッサンやクロード・ロランの最上の作品よりも大切な教えを観察眼をもつ画家に与えるであろう。

(Nature, to be understood, should be studied in all her varieties. To know how to cloath her to the best advantage, we must strip her naked. The anatomy, if I may so express myself, of woods and hills, is as essential to the landscape painter...and the leafless grove, the dismantled hill, nay, the very gloom of night itself, when nothing is discernible but the mere outline of surrounding mountains, may furnish more important lessons to the

observant artist, than even the finest pictures of Poussin and Claud Loraine[sic].) [*Ibid.* 343-4.]

絵画作品の鑑賞を出発点として自然の絵画化にこだわるギルピンの違いは、自宅から約 20km 離れた Builth 地域における夜間の山歩きであり、しかも季節は冬に近い晩秋のことである。ギルピンお好みの〈色調の多様性、光と影の様々な塊〉(diversities of tint...varied masses of light and shadows) は姿を消して、暗闇を通して唯一眼に入るのは「一本の太い途切れることのない、けれども、際限なく変化する線、そして、濃淡のある影からなる 2 つの大きな塊」(one bold, unbroken, but eternally diversifying line, and two broad masses of modified shade) であったと述べ、ミルトンの一文をもって自説を補強する。

「光は皆無、むしろ、眼に見えるのは闇」

(No light, but rather darkness visible)

この引用にはセルウォールのギルピン美学に対抗しようとする意識を感じ取ることができるのではないだろうか、というのは、ギルピンの『ワイ河紀行』における手法と論理を借用することによって先輩作家の主張を覆そうとしているからである。ギルピンは John Dyer の “Gronger Hill” における遠近法の使用法について苦情を述べている。

ここに彼 [ダイアー] の大きな規則無視が露わになる。彼の城は赤く染まった森よりもはるかに薄い色で描かれていなければならないのに、前景向きの強い色調が用いられている。壁面にツタが這っているのさえ見える。この種の違反は風景描写の詩には普通であるが、私が著者の不正確を言挙げするのは、彼が画家として、少なくとも己の芸術の最も明白な原理を遵守すべきであったと云わんがためである。ミルトンが遠くの城を導き入れる時に、どれほどの絵画的美をもってしていることか。

塔と銃眼が彼の目に入ってくる

樹木の枝葉に包まれつつ高く聳えて

(Here his great want of keeping appears. His castle, instead of being marked with still fainter colours, than the purple-grove, is touched with all the strength of a foreground. You see the very ivy creeping upon its walls. *Transgressions* of this kind are common in

descriptive poetry...But I mention only the inaccuracies of an author, who, as a painter, should at least have observed *the most obvious principles of his art*.—With how much more picturesque beauty does Milton introduce a distant castle:

Towers, and battlements he sees,
Bosomed high in tufted trees.)

[William Gilpin, *Observations of the Wye*, 61. *Italics mine.*]

画家のダイアーに対するギルピンの遠近法無視との批判は痛烈であるが、その際ミルトンという権威の一句を引き合いに出していることに注目するならば—そして、おそらくギルピンの読者が上述のセルウォールのミルトン引用に出会う時、その論理とともにこの一節を思い出すことと思われる—セルウォールが本歌取りを企んでいることに気づくに違いない。まだまだ一人前の作家としての評価を得ていないことを自覚していたセルウォールにとって絵画観、自然観、文学的素養、そして高度に論理的な文章で著名流行作家ギルピンを凌駕することは2度目の作家デビューには大きな意義をもつことであったと思われる。

さらに二、三「ワイ河種々相記」独特の記述を瞥見してみたい。セルウォールもギルピン同様、自然の様相の変化に大きな関心を寄せている。ただ、セルウォールの場合は、風景の表層的な多様性あるいは短時間に変化する様相というより、自然の骨格、川の入り組んだ蛇行、川床と流れの果てのない変化といった、巨視的な感覚に基づいた地景感と表現することができるようである—

この状況 [ワイ河が一夜にして谷間に溢れて洪水の濁流となる様] は、壮大さにおいて劣る景色の魅力を構成する偶然の様相や小さな美が仮になかったとしても余りにも圧倒的な引力を発揮するので、木々を一本残らず売り払ったとしても、灌木を全て引っこ抜いたとしても、崇高さを台無しにしたり、情景の美を損なうことにさえないであろう。なぜなら、河と山々が後に残り、地景の堅固な特徴は不変のままであろうから。

(These circumstances produce a charm so independent of those accidents and minuter beauties which constitute the attraction of less majestic scenes, that you might even sell every tree, and exterminate every shrub, without destroying the sublimity, or even the beauty of the scene: for the river and the mountains would still remain, the *solid features of the landscape* would be yet unaltered;)[*Ibid.* 344-5. *Italics mine.*]

かくして、セルウォールの風景はもはや地景と表現する方がより適切なほどにギルピンから遠ざかったと感ぜられるであろう。セルウォールは読者にもうひとつの冬の奇観を提供する。11月の末、数日続いた小雨に代わって厳しい霜が降りた時に造られた、大小全ての事物が透明な氷に包まれた大自然の姿である。

山々と谷、果樹園と頭を垂れた森、牧場、干草積み、家の屋根、すべてが同じように氷の殻に閉じ込められて、この上なく美しい水晶からなるひとつの広大な風景を生ぜしめていた。

(Mountains and valleys, orchards and hanging forests, pastures, hay-ricks, and roofs of houses, all were incrustated alike, and presented one wide landscape of the most beautiful crystal.)[vol. 6, 20.]

そして、セルウォールの観察の独自性は、巨大な視界の中に極小の植物が、一見したところ同じ資格で生きて存在していることであるように感ぜられることである。これは間違いなく、農業の経験に基づいた生活に直結した観察といてよいであろう—

11月の寒気が厳しくなる前に緑の一葉を地表に萌え出した若小麦が、氷に包まれてはいるものの、はっきりと見えた。

(The young wheat that had ventured its green blade above the earth during the milder part of November, was still conspicuous through the ice that incrustated it;)[*Ibid.*]

最後に、セルウォールの観察が美学的観察にとどまらず、やはり社会的かつ政治的視野と結びつけられることを確認したい。すでに見てきたようにエッセイの大半はギルピン美学に相對するセルウォール美学の表出に費やされるわけであるが、最後の場面でワイ河の春の雪解け水による大規模被害に触れて、Radnorshire 選出の国会議員の所有になる大農場の被った損害額が500ポンドと見積もられていることに言及する。「けれども、この種の災害における慰めは、最もよく耐えられる人々にふりかかるのが常であるということである」(In disasters of this kind, however, the consolation is, that they necessarily fall upon such persons as are best able to support them)[21] とセルウォールはコメント

する。彼の見解では、原状回復する力がある資産家の大農場の破壊や大邸宅の火災よりはるかに悲惨なものは「おんぼろ小屋が損壊したり、貧民労働者のネギやジャガイモのわずかな収穫がだめになること」(the ruin of a cottage, or the destruction of some poor labourers' little crop of leeks and potatoes)[*Ibid.*]であると断言して、話を締め括る。この記述は明らかに「ワイ河種々相記」の本論からかなり外れた、いわば付け足しの所信ともいうべきもので、おそらく読者の大半もそのように受け取ることであろうが、凶らずも、あるいは、凶って、著者の地金が現れたことは否定できない。すでに触れた『月刊誌』のリベラル的編集方針とも合致することはいうまでもないであろう。

「徒歩旅行記」

「徒歩旅行記」は『月刊誌』99年8月号から1801年11月号にかけて連載され、最終記事に「続く」(To be continued.)とあるので、これ以降の投稿予定があったのかもしれない。ただ、内容的には一応の終結感があり、中断と断定することは困難と思われる。ロンドンにおけるような政治運動との直接的な関連を見出そうとすれば、この種のエッセイの連載は唐突な行動との印象は免れないかもしれない。しかもE. P. トンプソンはこのエッセイを「大部分<ロマンティックでピクチャレスクな物語>の変哲もない繰り返し」(unremarkable, being largely devoted to conventional rehearsals of the 'romantic and picturesque')と呼び、大した値打ちは置いていない。とはいうものの、私としては、政治的姿勢(の変化)とセルウォールの文学的資質の確認には十分な役割を果たすと考えている。このエッセイの<前書き>に当たる部分において、セルウォール自身は以下のように記す—

著者は幼時より岩、小川、森、そして、古城、廃墟となった僧院が喚起する趣きのある道徳的瞑想の熱烈な愛好者であった。数年間は全く別種の用向きがこの好みを満たすことを許さなかったが、諸々の事情により漸く公的な仕事からの引退を決意すると、若年の印象が一層力強く甦ってきたのである。他方、ピクチャレスクでロマンティックな事物に対する情熱と二人三脚で進んでも尤もと思われる、好奇心を生み出すような環境に

恵まれた。[また、]労働者階級の人々の歴史と実情に関連したあらゆる事態が、人類の幸福への気がかりで脈打っている心にとって重要な事柄となっていた。そして、この種の事柄はく土地に根付いた草のように一つ所に動かないまま>では収集することは不可能である。

(The writer of the following journal has been from his infancy an enthusiastic lover of that moral meditation which rocks and brooks and woodlands, and fragments of old castles and ruined abbeys, have a tendency to inspire. Pursuits, indeed, of a very different nature estranged him, for several years, from the indulgence of this propensity. But the general aspect of affairs at length determined him to retire from public exertion, the impressions of early youth revived with increasing force. In the mean time circumstances had produced another species of curiosity well calculated to go hand in hand with a passion for the picturesque and romantic. Every fact connected with the history and actual condition of the laborious classes had become important to a heart throbbing with anxiety for the welfare of the human race: and facts of this description are not to be collected by remaining, 'like a homely weed, fixed to one spot.')

[MM, August 1799, vol. VIII, 532.]

上記文中にある2つの概念「ピクチャレスクでロマンティック」と「労働者階級の人々の歴史と実情に関連した・・・事実」はそれほど相性のよいものとは思えないが—たとえば、『ワイ河紀行』におけるティンタンアビーに住みついている浮浪者たちについてのギルピンの冷淡な態度を思い出すと—もちろんセルウォールにとっては両者ともが、別々の意味で強く関心を引くものであったことは間違いない。そして、旅行の動機については今ひとつ分からないというのが大勢のようであるが、その大きな理由は「徒歩旅行」の内容に関係していることは明らかであろう。荒っぽく二分すれば、政治的動機かギルピン流の景観ハンティングかということになるが、私自身はおおよそ両者併存とみている。前者はいうまでもなく、「大規模農場について」の延長線上にあり、活動の場をロンドンおよび地方都市における講演から、田園地方の実地検分へと移そうとしたとみることができる。後者については政治活動家から文筆家への転身を考えることができる。前述のようにE. P. トンプソンは後者に大きく傾いた見解を提示しているが、私は等分の立場を取りたいと思う。セルウォールの本心はわからないが、エッセイの書き方は虚心に読めばピクチャレスクの雰囲気

醸し出しつつも本格的にピクチャレスクに深入りした描写は少なく、丁寧な実写を提示しているのは、むしろ農村の社会的、経済的実情といえる。例えば—

雨にもひるむことなく、私たちは Salisbury から Wilton-House へと向かった。道路から遠くに見えるその庭園は平板で面白味のない田舎の風景のかんりの飾りとなっている。途次、私たちは Quidhampton 村を通ったのだが、製造業という観点からするとこの村はウィルトンの郊外、もっと言えば植民地、と表現してもおかしくなかった。近在の毛織物工場は成人男女のみならず 5、6 歳の子どもにまで職場を提供しているのである。このような幼児の日々の労苦は（大人の健康な活力に到達するには、緑の草地の上で手足を気ままに伸ばして騒々しく跳ね回ってなければならぬのだが）両親の労働の賃金に上乘せされて、いうまでもなく、その稼ぎで親の負担を軽くするとみられているのであろう。とはいえ、クウィダンプトンには慰安と住居という点から誇るべきものはほとんど見当たらなかった。家といえば、一体にお粗末なもので、小さく、汚かった。煉瓦造りや、漆喰塗りの家もあったが、外は裸の土壁が丸見え、内も同様のものが大半であった。家具と呼べるものもほとんどなく、菜園のカケラにさえ恵まれていない家もあった。悲惨の一覧表を完成するかのごとくに、この教区には、多数のあわれな捨て子が囚われて休みのない精勤を求められる救貧院があった。

(From Salisbury we proceeded, unintimidated by the rain, to Wilton-House, whose park, viewed at a distance from the road, is a considerable embellishment to the scenery of this flat and uninteresting country. In our way we passed through the village of Quidhampton, which in a manufacturing point of view may be considered as a sort of suburb or colony to Wilton. The woollen manufactories around furnish employment not only to men and women, but to children also, so early as between five and six years of age. The daily toil of these little infants (who, if they are ever to attain the vigour and healthful activity of manhood, ought to be stretching their wanton limbs in noisy gambols over the green) is added to the labours of their parents; whose burthens will, of course, be considered as relieved by their earnings: yet, Quidhampton seems to have little to boast in point of comfort and accommodation. The cottages in general are wretched, small and dirty. Some of them are built with brick, others are plaistered, and many exhibit nothing but miserable mud walls, equally naked without and within. They are wretchedly and scantily furnished; and few have even the advantage of a bit of garden. To complete the catalogue of misery, there is a work-house in the parish, in which a number of poor deserted infants are consigned to captivity and incessant application.) [MM, January 1800, vol. VIII, 697.]

もちろん、もう少し美観描写に力を注いだ例が見つからないわけではない、

『ワイ河紀行』に見られるような旅行の途中で遭遇した美術品についての個人的な骨相学的感慨（*MM*, 1800, vol. IX, 17-8.）を記す一種の脱線等がないわけではないが、これらは私には流行に乗じた新進作家特有の読者サービス、あるいは、政治運動家・社会改良家のカモフラージュのように感じられる。というのも、例えば、*Brutus* の彫像に関する長広舌の終いには国家政治の改革についてセルウォールの持論が飛び出すからである。

一国の公正という美德が回復されるのは犯行によってなされるものではない。たとえ専制君主といえども言い分も聞かず、罪状認否も行わず処刑することによって、自由と正義を戴くことはありえない。

(It is not by crimes that the virtue of a country is to be restored. It is not by executing even a tyrant unheard and unarraigned, that liberty and justice are to be promoted.) [*Ibid.*, 18.]

* この論文は同タイトルで関西コールリッジ研究会第 180 回例会（2018 年 11 月 24 日、同志社大学）において発表した論考に手を入れたものである。ただ、口頭発表原稿の名残を払拭することは困難であった。また、「要旨」は上記研究会会報原稿に基づいている。

Works cited and referenced

A Little Welch Farmer. "A Little Welch Farmer." *The Monthly Magazine*, November 1798, vol. VI, 323-4.

_____. "A Little Welch Farmer." *The Monthly Magazine*, February 1800, vol. IX, 529-34.

A. Q. Q. L. "On large Farms." *The Monthly Magazine*, April 1796, vol. I, 188-9.

J. T. "The Phenomena of the Wye, during the Winter of 1797-8." *The Monthly Magazine*, May and July 1798, vol. V, 343-6 and vol. VI, 20-1.

John Thelwall. *Poems, Chiefly Written in Retirement with Memoir of the Life of the Author*. Hereford: W. H. Parker, 1801.

_____. *Rights of Nature, against the Usurpations of Establishments, Part the Second*. London: H. D. Symonds, 1796.

_____. *Sober Reflections on the Seditious and Inflammatory Letter of the Right Hon. Edmund Burke, to A Noble Lord*. London: H. D. Symonds, 1796.

- _____. (Ed.) Judith Thompson. *The Peripatetic*. Detroit: Wayne State University Press, 2001.
- _____. (Ed.) Gregory Claeys. *The Politics of English Jacobinism: Writings of John Thelwall*. University Park, PA: The Pennsylvania State University Press, 1995.
- _____. (Ed.) Robert Lamb and Corrina Wagner. *Selected Political Writings of John Thelwall*. 4 vols. London: Pickering & Chatto Limited, 2009.
- William Gilpin. *Observations on the River Wye, and several parts of South Wales, etc. relative chiefly to picturesque beauty; made in the summer of the year 1770*. London: R. Blamire, 1782.
- J. Johnson. *Prospectus of A New Miscellany, To Be Entitled The Monthly Magazine; or British Register, etc.* London: R. Philips, January 12 and 18, 1796.
- _____. (Proprietor.) *The Monthly Magazine; or British Register, etc.* Vol. V. London: R. Philips, 1798.
- Damian Walford Davies. *Presences that Disturb: Models of Romantic Identity in the Literature and Culture of the 1790s*. Cardiff: University of Wales Press, 2002. Appendix にセルウォールの未公刊書簡を含む。
- David Simpson. "Public Virtues, Private Vices: Reading between the Lines of Wordsworth's "Anecdote for Fathers." (Ed.) David Simpson. *Subject to History*. Ithaca and London: Cornell U. P., 1991. 163-90.
- E. P. Thompson. "Hunting the Jacobin Fox", *Past & Present*, No. 142, (February 1994), 94-140. セルウォールのウェールズ移住の主要な理由は政治活動から身を引くためであったと主張。
- _____. *The Making of the English Working Class*. London: Victor Gollancz Ltd., 1963.
- Judith Thompson. "Chronology of the Life of John Thelwall" (from *Romantic Circles*: "John Thelwall in Time and Text." "http://www.rc.umd.edu/reference/thelwall_chronology.")
- _____. *John Thelwall in the Wordsworth Circle: the Silenced Partner*. New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- Michael Scrivener. "John Thelwall's Letters in the British Library," *Romanticism*, vol. 16, Issue 2 (July 2010), Edinburgh University Press. 139-51. セルウォールの未公刊書簡を含む。
- _____. *Seditious Allegories: John Thelwall and Jacobin Writing*. University Park, PA: The Pennsylvania State University Press, 2001.
- _____. "The Rhetoric and Context of John Thelwall's 'Memoir.'" (Ed.) G. A. Rosso and Daniel

- P. Watkins. *Spirits of Fire: English Romantic Writers and Contemporary Historical Methods*. London and Toronto: Associated University Press, 1990. 112-30.
- Nicholas Roe. "Coleridge and John Thelwall: The Road to Nether Stowey." (Ed.) Richard Gravil and Molly Lefebure. *The Coleridge Connection: Essays for Thomas McFarland*. Basingstoke: Macmillan, 1990. Penrith: Humanities-Ebooks, 2007.
- _____. (Ed.) *English Romantic Writers and the West Country*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010.
- _____. *The Politics of Nature: William Wordsworth and Some Contemporaries*. Basingstoke: Palgrave, 2002.
- P. J. Corfield and Chris Evans. "John Thelwall in Wales: New Documentary Evidence," *Bulletin of the Institute of Historical Research*, 59 (1986), 231-39. ウェールズ移住後のセルウォールの政治活動を強調。セルウォールの未刊書簡を含む。
- Steve Poole. (Ed.) *John Thelwall and Acquitted Felon*. London: Pickering & Chatto, 2009.
- 山田 豊『詩人コールリッジ―「小屋のある谷間」を求めて―』, 山口書店 1986 年。セルウォールへの言及相当数あり。

(元臨床英語准教授)